

障害児施設の描画活動の取り組みについて

— 言語発達と描画発達の関連について —

About the efforts of drawing activity y at the handicapped child facilities

— About the relation between the language development and the drawing development —

○高木玉江*・島田美代子**

Takagi Tamae*・Shimada Miyoko**

大阪健康福祉短期大学*・西淀川発達支援センターたんぽぽ**

Osaka College of Social Health and Welfare Department of Child Care and Education*

NIshiyodogawa Developmental Support center Tanpopo

Key words : 描画活動, 描画発達, 障害児

目的 子どもの表現することは、自分の仕事を遂行すること、自己の世界を創り出す事といわれている(岡本,2005)。そして、自己の「内なるもの」をなんらかの働きを媒介として「外へ」表すことでもある。幼児の表現方法として絵画制作、音楽リズムや舞踊、言語がある。表現活動そのものが主体としてもつ意味は、結果的産物の中よりも行為としての体験、表現活動を行っている時の感情や身体感覚、努力や達成感、表現を試みる中で出会う自分、表現の中に見出す行為主体としての新しい自分を感知するためのはじまりでもある(岡本,2005)。特に、表現の中の描画活動では、活動の中で描く絵は、その子の、その時の内的体験内容そのものを表している。その描かれた絵はなぐり描きであっても、その時の自己と他者のイメージを表している。描画の発達は認知機能や運動機能、感性や感情の発達と密接に関連している。そこで、療育施設の取り組みとして自由画を描くときに丁寧に子どもの発声や喃語、言葉を聴き取り、描画が子どもにとってどんな表現なのかを記録し、自由画に描いた表現と言語表現との関係のみていく。

方法 : 対象児 : 発達支援センターに毎日通うS児
期間 : 3歳5か月から5歳9か月の期間

時期:20XX年2月~20XX+2年9月までの1年7か月
20XX+2年4月より幼稚園と週1日の療育施設の並行通園だった。 道具 : 色水性ペン、A2の更紙

描画活動 : 療育施設では6人~7人のグループに分け活動を行っている。毎日の生活経験の中で、食後にゆったりする時間、子どもが描きたい時に、自由画が描けるように部屋に水性ペンと紙を設定した。

手続き : 子どもが自由画を描くと職員が子どもの描いたものを1つ1つ何を描いたのか聞き、話言葉を書きとめていく。子どもと職員とのなかでやり取りを続けながら丁寧に聞いていった。

結果 : 評価方法 : 新版K式発達検査2001を使用し、姿勢運動、認知・適応、言語・社会の領域を発達年齢(DA)で分析した。描画課題分析についてグッドイナフ人物知能検査得点項目を用い、自由画に描いた絵を点数化し発

達年齢(MA)で評価した。1枚の紙の中で高得点の描画を評価した。時期区分として新版K式発達検査を行った年齢を3群に分けた。1期は、3歳5か月から4歳5か月だった。言語・社会領域DAは、2歳6か月だった。物の名称は理解できるようになった。語彙も増大していった。1語文から2語文になった。MAは、なぐり描きから丸になり、評価点0点、「オニ」や「むしさん」と命名した。2期は、4歳6か月から5歳5か月だった。言語社会領域のDAは、3歳5か月だった。“~するときにはどうする”という問いに答えることができるようになった。描画のMAは、評価点5点:頭・両目・口・両手・髪の毛。発達年齢MAは3歳8か月、紙に大きく人の顔、きょうりゅうを描き、線を組合わせて、「ほね」「め」「きょうりゅうもあります」と言語化した。3期は、5歳6か月から5歳9か月。言語社会領域のDAは、3歳5か月だった。仮定の問いに答えることができた(表1)。描画のMAは、評価点4点:頭・両目・口・両手、丸、楕円、四角を組合わせた。発達年齢MAは3歳6か月だった。紙の中に家族全員を示し、「とうさんやっほーって」と家族で行った体験を話した。

表1.3期の発達年齢ごとの反応

時期	発達年齢 (DA)	検査項目	結果	描画の特徴	グッドイナフ人物知能検査得点項目
1期	3歳5か月	言語・社会	2歳6か月	物の名称は理解できるようになった	物の名称
2期	4歳6か月	言語・社会	3歳5か月	“~するときにはどうする”という問いに答えることができるようになった	仮定の問い
3期	5歳6か月	言語・社会	3歳5か月	仮定の問いに答えることができた	仮定の問い

考察 描画の発達が進むと、言語発達も進んでいき、描画表現も多彩になった。その上、描いたものを命名するだけでなくストーリーのある体験の話を語れるようになった。描画発達や言語発達には、子どもにとって印象深い楽しい経験が大きな意味をもつことが分かった。

参考文献 : 新見俊昌(2010)子どもの発達と招く活動、かもがわ出版
岡本夏木 (2005) 幼児期一子どもは世界をどうつかむか一岩波書店